

## 言葉に関する発達理解と保育実践のつながりを

### 意識した領域「言葉」の指導法の有効性 (2)

一言語発達に関する子ども理解と言語発達を促す保育内容の理解に着目して—

松尾 由美・塚越 亜希子

#### 1. 問題と目的

塚越・松尾(2020)では、言葉の発達過程と子どもの言葉を育むための援助方法について事例や映像を活用して学ぶ講義と講義を通して学んだ知識を生かして模擬保育を行う演習を交互に取り入れ、そのつながりを意識させた保育内容「言葉」の授業実践について報告し、学生の模擬保育の振り返りからその有効性を検討した。その結果、模擬保育後の振り返りにおいて、保育の流れをよりスムーズにするための改善点については多くの学生が気づくことができた。一方で、本授業実践でねらいとしていた「言葉に関する発達理解と保育実践のつながり」を意識し、子どもの発達に合うよう保育実践を改善することができた学生はほとんどいなかった。その理由として、塚越・松尾(2020)では、『模擬保育が計画した実際の年齢の子どもではなく、大人である学生を前にして実施したことで、自らの保育実践を対象とした子どもの発達段階を視点にして振り返ることが難しかったこと』を理由に挙げている。しかし、そもそも子どもの言語発達の過程や、保育計画を立案した対象の年齢の子どもの言葉の発達の特徴に対する理解が不十分であったために、子どもの発達に着目した保育実践の振り返りができなかった可能性も考えられる。

幼稚園教育要領解説(文部科学省, 2018)では、指導計画の作成上の基本的事項の一つとして発達理解が挙げられており、『指導計画の作成においては、学級や学年の幼児たちがどのような時期にどのような道筋で発達しているかという発達の過程を理解する』ことの必要性を指摘している。保育所保育指針解説(厚生労働省, 2018)でも同様に、指導計画を作成する際、『...(前略)子どもの実態の把握を基に、子どもの発達過程を見通し、養護と教育の視点から子どもの体験する内容を具体的に設定する』としている。このように、指導計画を作成する際に、子どもの発達過程を理解した上で、個々の子どもの発達の見通しを立てることは必要不可欠であるものの、保育者養成段階の学生にとっては難しいことが先行研究によって示唆されている。教育実習における実習生と指導担当保育者の実習記録への記述内容の内容

分析を行った中川（2014）によると、実習生と保育者との間で子ども理解や発達に合わせた保育に対する認識にズレがあり、特に実習期間の前半で、保育士が子どもの発達の実情を捉え、それに合わせた保育の方法を考えるよう実習生に助言する記述が多かったことを指摘している。実習担当保育者と実習生の上に発達過程の理解にズレがある理由の一つとして、現役保育者は保育経験の中で一般的な子どもの発達の過程に関する知識を蓄積してきたことが挙げられている。

一方で、保育者養成段階の学生も一般的な子どもの発達過程について十分知識を持つものの、それを保育現場において実際に目にする子どもを理解する時や子どもと関わる時、指導計画を作成する時にどのように結び付けていけばいいのかわからないという可能性も考えられる。塚越・松尾（2020）が報告した授業実践において、学生が子どもの発達に着目した模擬保育の振り返りができなかった理由も、一般的な子どもの言語発達の過程については理解しているものの、保育実践との結び付け方がわかっていなかったことが原因なのかもしれない。模擬保育での振り返りが不十分であった理由を議論するために、受講生が何を理解し、どういう知識が不足しているのか確認する必要がある。そこで、本稿では、保育内容「言葉」の指導に必要な知識の中のどのような側面で理解が足りないことが原因で、子どもの発達に着目した模擬保育の振り返りができなかったのか考察することを第一の目的とする。

加えて、塚越・松尾（2020）が報告した授業実践において、当該授業の到達目標の一つである『子どもの発達を「言葉」の視点から捉え、子ども理解を深めながら保育内容について具体的に理解』できているのかを確認するために、本授業がどのような保育内容「言葉」にかかわる知識を高めるのかを明らかにし、本授業の有効性について検討することを第二の目的とする。

上記2つの目的を達成するために、本稿では受講前後で学生の①子どもの言語発達に関する理解や②言葉の発達を促す保育内容の理解、③子どもの発達と保育実践を結び付ける力が高まったかどうか検討する。

### 3. 方法

#### 3. 1 対象者と手続き

関東短期大学こども学科 2019 年度後期（2019 年 10 月～2020 年 1 月）に開講された保育内容「言葉」を履修した 62 名に調査を依頼した。調査は、保育内容「言葉」の第 1 回目と第 15 回目の授業内で施した。調査開始前に、調査の目的の他、調査への協力は強制でないこと、調査への参加や回答内容は成績に一切関係がないこと、回答データは匿名化され適切に保管された後、破棄されることを口頭で説明

した。調査への協力を承諾した場合のみ、調査に回答するよう求めた。

### 3. 2 調査項目

#### (1) 言語発達に関する理解

言葉の発達に関する知識について確認するため、以下の項目等について尋ねた。調査項目で尋ねた知識は、1 年次後期に開講された「保育の心理学 I」で既習した内容であった。なお、保育内容「言葉」の履修者は 1 名を除き、「保育の心理学 I」の単位は修得済みであり、残りの 1 名も保育内容「言葉」の履修と並行して 2 年次後期に再履修中であった。なお、項目の詳細は、巻末に資料 1 として添付した。

##### ① 言葉の発達過程を問う項目

一般的な子どもの言葉の発達（クーイング、喃語、初語、語彙爆発、二語文、プライベートスピーチ）について、年齢が小さいうちにあらわれるものから順に、正しい順序に並び替えるよう求めた。

##### ② 言葉の発達に関する専門用語を問う項目

子どもの言語発達に関する姿について書かれた文章を読み、それに該当する専門用語（クーイング、喃語、初語、語彙爆発、二語文、プライベートスピーチ）を選択肢から選んで回答するよう求めた。

#### (2) 言葉の発達を促す保育内容の理解

##### ① 保育における「言葉」について保育士として必要な資質に関する理解

平成 27 年度保育士試験（地域限定試験）の筆記科目試験「保育実習理論」問 16 において出題された保育における「言葉」について保育士として必要な資質を問う項目について尋ねた。3 項目について適切な記述か否かを回答するよう求めた。

##### ② 話し言葉に関する子どもとの関わりを問う項目

平成 29 年度保育士試験（後期）の筆記科目試験「保育実習理論」問 16 において出題された話し言葉の発達を促す保育士として適切な子どもへの関わりを問う項目について尋ねた。まだ幼児語を話す 3 歳児が幼児語を使って保育士に話しかけてきた場合取るべき保育士の対応（4 項目）について、言語の発達を促していくために適切かどうかを回答するよう求めた。

##### ③ 読み書きに関する子どもとの関わりを問う項目

平成 30 年度保育士試験（前期）の筆記科目試験「保育実習理論」問 17 において出題された幼児期の読み書きの発達を促す保育士として適切な子どもへの関わりを問う項目について尋ねた。4 項目について、保育士の取るべき対応として適切かどうかを回答するよう求めた。

#### ④保育技術に対する理解を問う項目

保育士試験の筆記科目「保育実習理論」において、平成27年度に問14及び平成29年度（後期）に問13として出題された保育技術に関する項目について尋ねた。保育場面で紙芝居を演じる際や、絵本の読み聞かせをする際の留意事項について書かれた8つの文章について、適切かどうかを回答するよう求めた。

### （3）子どもの発達と保育実践を結び付ける力

#### ①対象年齢やねらいに合った絵本を選択させる項目

平成27年度保育士試験の筆記科目試験「保育実習理論」問15及び平成31年度保育士試験（前期）の筆記科目試験「保育実習理論」問13において出題された絵本に関する知識を問う項目について尋ねた。5つの事例を読み、対象児の年齢やねらいを考慮して、適切な絵本を選択肢の中から選択するよう求めた。1事例のみ3つの絵本を選択したため、7問の回答が得られた。

#### ②絵本の内容から乳児に合った絵本を選択させる項目

平成30年度保育士試験（前期）の筆記科目試験「保育実習理論」問13において出題された絵本の内容から乳児に合った絵本を選択させる項目について尋ねた。4冊の絵本について、乳児に対する読み聞かせを想定し、オノマトペの面白さを描いたものかどうかを回答するよう求めた。

## 4. 結果

### 4.1 得点化の方法

すべての問いについて、正答した場合を1点、誤答の場合を0点として採点した。なお、発達の順序を問う問題の場合、当該言語発達は何番目にあらわれるか正答した場合（例：一番初めにあらわれる特徴を正しく回答したか、2番目にあらわれる特徴を正しく回答したか）を1点とし得点化した。各領域において、合計得点を算出した。得点の範囲、合計得点の平均値・標準偏差を表1に示した。

### 4.2 保育内容「言葉」の受講前後の変化

保育内容「言葉」の授業を受講することで、子どもの言葉の発達に関する理解、言葉に関する保育技術についての理解が深まったかどうかを検討するため、各領域の第1回時に実施した調査で得られた合計得点と、第15回時に実施した調査で得られた合計得点を用いて、対応のあるt検定を行った（表1参照）。なお、2回の調査ともに参加した54名を分析の対象とした。その結果、言語発達に関する理解

について、有意水準にはわずかに達しないものの、発達過程、専門用語を問う問いの合計得点がともに、受講前よりも受講後で高まる傾向が見られた（発達過程： $t(53) = -1.67, p < .10$  / 専門用語： $t(53) = -1.95, p < .10$ ）。加えて、絵本の内容から幼児に合った絵本を選ぶ問い( $t(53) = -2.14, p < .05$ )、紙芝居や絵本の保育技術について問う問い( $t(53) = -2.82, p < .01$ )において、受講前よりも受講後の方が有意に合計得点が高かった。その他の領域では受講前後の合計得点の間に有意な差は見られなかった。言葉に関する保育士の資質を問う問題、言葉の発達を促す保育士の子どもへの関わりについて問う問題（話しことば、読み書き）では、平均値に 1 標準偏差を加えた値が、得点範囲の最大値を超え、天井効果が見られた。特に、言葉に関する保育士の資質を問う問題では、得点の最大値 3 に対して、受講前の平均値が 2.94 であり、ほとんどの受講生が受講前から 3 問すべてに正答していた。

表 1 言語発達、言語発達を促す保育内容の理解、  
発達と保育実践を結び付ける力の受講前後の変化(N=54)

	事前	事後	<i>t</i>	得点 範囲
	平均(標準偏差)	平均(標準偏差)		
(1)言語発達に関する理解				
①発達過程	2.54 ( 1.73 )	2.96 ( 1.73 )	-1.67 †	0~6
②専門用語	3.74 ( .85 )	4.00 ( .89 )	-1.95 †	0~6
(2)言語発達を促す保育内容の理解				
①資質	2.94 ( .23 )	2.87 ( .48 )	1.07	0~3
②関わり(話しことば)	3.54 ( .79 )	3.43 ( .77 )	.97	0~4
③関わり(読み書き)	3.78 ( .42 )	3.81 ( .52 )	-.53	0~4
④保育技術	7.22 ( .66 )	7.54 ( .64 )	-2.82 **	0~8
(3)子どもの言語発達と保育実践を結び付ける力				
①絵本 (年齢・ねらい)	4.43 ( 1.57 )	4.33 ( 1.49 )	.39	0~7
②絵本 (内容)	3.22 ( 1.33 )	3.67 ( .85 )	-2.14 *	0~4

## 5. 考察

本稿では、塚越・松尾(2020)で報告された保育内容「言葉」の授業によって、①受講した学生のどのような保育内容「言葉」にかかわる知識の理解を高めるのかを明らかにした上で、②どのような保育内容「言葉」の指導に必要な知識が不足していることが原因で、学生は子どもの発達に着目した模擬保育の振り返りができなかったのかを考察することを目的としていた。

### 5. 1 保育内容「言葉」の受講によりどのような理解が高まったのか

#### （1）言語発達に関する理解

受講前と比べ、15回の授業を受講した後では、有意水準には達しないものの言語発達に関する理解が発達過程・専門用語の理解ともに、やや高まる傾向が見られた。しかしながら、発達過程に関する理解は、受講後でも平均して6問中約3問(2.96点)、また、言語発達に関する専門用語も6問中4問しか正解しておらず、受講後でも正答率は高いとは言えない。出題された内容は、1年後期に開講された「保育の心理学Ⅰ」で学習した内容であるが、様々な科目を通して繰り返し学習しても発達に関する知識は定着しづらいことが示唆される。一方で、受講後にわずかながら上昇傾向が見られたことから、模擬保育の指導計画を作成するために対象となる年齢の発達について自身でおさらいをしたことで発達に関する知識がやや高まったのではないかと考えられる。対象となる年齢の子どもの姿を思い描きながら指導計画を作成し模擬保育を行うアクティブラーニングにより、定着しにくい発達についても理解を深める可能性が示唆される。しかしながら、その上昇傾向はわずかであり、大きな変化があるとは言い難い。子どもの発達については様々な科目で扱われるが、実習での経験も含め、どの科目で子どもの発達のどの側面についてどのように教育し、最終的に、保育に必要な発達という視点で子どもを理解する力を育てていくのか、カリキュラムマネジメントをする必要性があるだろう。

#### （2）言語発達を促す保育内容の理解

言語発達を促す保育内容の理解のうち、保育技術に関する留意事項については受講前と比べ、受講後に有意に高まることが示された。保育技術に関する留意事項は、他の学生の模擬保育を評価する際、「できているか否か」目に留まりやすく、また、自身が模擬保育をするときに気を付けようと意識が高まると考えられる。講義形式で知識として一方的に伝達するのではなく、様々な保育実践を見る中で、具体的に保育で注意しなくてはならないことについて考えさせる機会を設ける方が、理解し

やすいのではないだろうか。

一方で、保育における「言葉」について必要な資質や言葉に関する子どもとのかわりを問う項目については、受講前において天井効果が見られ、既に得点が高かった。2 年前期までの授業や実習での経験によって、既に培われていたものと推察される。

### (3) 子どもの発達と保育実践を結び付ける力

本授業受講によって、子どもの発達と保育実践を結び付ける力が育ったかどうかを検討するために、子どもの実態に合わせて絵本を選ぶ力を測定する項目を尋ねた。絵本の内容から乳児に合った絵本を選択させる項目では、受講前と比べ受講後で正答数が増えることが示された。模擬保育のための指導計画を作成する際、また、他者の模擬保育を見る中で、様々な絵本に接する機会があったことから、今まで知らなかった絵本の内容に対する理解が高まったものと推察される。保育者養成校の学生に保育実践をするにあたり、乳幼児に触れさせたい絵本を選択させる調査を行った橋村(2018)によると、学生が選択する絵本には偏りがあり、もともと自分の好きな絵本や過去に読んでもらった経験をもとに絵本を選択する傾向を指摘している。したがって、他者の保育実践を見ることを通じ、自分がこれまでに読んだことのない新しい絵本に触れる経験は、保育実践をする際に絵本の選択肢を広げ、子どもの発達や実態に合ったものを選択する力につながるのではないだろうか。

一方で、ねらいや対象年齢に合わせた絵本の選択に関する項目については、受講前後で変化は見られず、正答数も 7 問中約 4 問であり、苦手なままであると言える。本授業では、各年齢における子どもの言語発達について講義形式で学んだものの、子どもの発達と保育実践を結び付け指導計画を作成する部分については、学生自身で各自考えるように指導した。しかし、模擬保育を見てみると、各年齢における言語発達の特徴については、理解したもののそれを保育実践にどう結び付ければいいのかわからない学生も多く存在した。発達に合わせた指導計画の作成については、教育実習指導や教育保育課程論の授業の中で繰り返し学習した内容であるため、本授業では詳しく取り扱わなかった。しかし、他の科目と連携し、様々な教授法を用いて、発達の視点で子どもの実態を捉えた上で指導計画を作成し保育実践を行う力を育てていく必要があるだろう。

## 5. 2 なぜ学生は子どもの発達に着目した模擬保育の振り返りができなかったのか

上述したように、本授業の受講により、子どもの言語発達に関する理解はやや高まったものの、受講後もそれほど高くない。とりわけ、子どもの言語発達過程に対

する理解の正答数は約半分であり、学生にとって発達過程を理解することは難しい。発達過程を理解していないため、発達の見通しを持たず、指導計画を修正する際にも、どこをどのように修正すればよいのかわからなかった可能性が考えられる。

加えて、子どもの対象年齢やねらいに合わせて絵本を選ぶ力については、受講前後で有意な変化は見られず低いままであった。そもそも、子どもの発達と保育実践とを結び付けて考える力が弱いため、模擬保育で行った実践を修正する際にも、そのような視点で修正することが難しかったと考えられる。

それでは、子どもの発達に着目した模擬保育の振り返りを行えるようにするためにはどうすればよいだろうか。山本(2018)は、保育内容のねらいと内容、子どもの言語発達における絵本の意義について、講義を通じて伝えた知識が学生の絵本選びには反映されないものの、実習中に何度も機会を得て絵本の読み聞かせを行うことで徐々に子どもの視点を獲得し子どもの実態に合った絵本を選ぶことができるようになってくると主張している。したがって、保育実践を行い、それに対する子どもの反応から、子ども理解が深まり、発達段階も含め子どもの実態に合わせた指導計画の作成・修正ができるようになってくると考えられる。塚越・松尾(2000)で指摘したように、本授業で行った模擬保育では、学生が子どもの代わりとなったため、実際の子どものとは異なり、子どもの実態に合わせた修正が難しかった。実習での経験と授業との関連、実習で習得させたいことを整理し、養成課程のカリキュラム全体を見据えた上、実習での経験をどのように養成校での授業での学びに活かすことができるのか、考えていく必要であるだろう。

### 5. 3 本研究の限界

本稿では、保育内容「言葉」を受講した学生のどのような保育内容「言葉」にかかわる知識の理解を高めるのかを明らかにするため、受講前後で比較を行った。しかしながら、他の授業も同時に受講しているため、今回得られた効果が、本授業のみで得られたものかどうかは不明瞭であり、解釈には注意が必要である。しかし、保育者として必要な資質・能力は、単一の科目のみで習得するものではなく、保育者養成課程のカリキュラムが一体となって総合的に伸ばしていくものであると考えられる。保育者養成校の卒業直前の時期に、保育者として必要な理解・力で、伸びた部分、不足している部分を整理した点では、本稿は一定の意義があるものと考えられる。

### 5. 4 まとめ

本稿では、塚越・松尾（2020）が報告した授業実践（保育内容「言葉」）の授業前

後において、保育技術に関する理解と、絵本の内容から乳児に合った絵本を選択する力が高まることが示された。一方で、発達に関する理解はやや高まったもののそれほど高くなく、とくに発達過程の理解については不十分であり、年齢やねらいに合わせた教材選択の力は低いままであった。発達段階を含め子どもの実態に合わせた指導計画の作成・修正のためには、発達過程の理解を定着させ、発達と保育実践を結び付けて考える力を育てる必要がある。一方で、領域「言葉」の授業だけで、このような理解や力を育てるのは困難であろう。発達に関する事項は様々な科目で繰り返し扱うもののなかなか定着しづらく、発達に合わせた指導計画を作成する力を高めることも難しい。科目間の連携を図りながら、保育者養成課程のどのタイミングで、どのような力を育てたいのか意識した上で、時期や科目に合わせてアプローチ（講義形式か、模擬保育課等）を変えていく必要があるだろう。

#### 引用文献

- 橋村晴美 (2018). 領域「言葉」における言葉の感覚が養われる教育方法についての一考察— 学生の絵本の選書から見えてきたもの— 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究, **3**(2), 19-28.
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説
- 中川智之 (2014). 教育実習における実習記録を通して見る保育者としての成長 川崎医療短期大学紀要, **34**, 39-45.
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説
- 塚越亜希子・松尾由美 (2020). 言葉に関する発達の理解と保育実践のつながりを意識した領域「言葉」の指導法の有効性(1) —模擬保育の振り返りに着目して— 関東短期大学紀要, **62**, 17-27.
- 山本聡子 (2018). 「保育内容指導法 言葉」における学生の学び—実習での経験とのつながりに着目して— 柳城こども学研究, **1**, 51-70.

添付資料 1 言語発達に対する理解を問う項目

※斜字部分は回答時には示されていない

1. ①次の子どもの発達を、年齢が小さいうちにあらわれるものから順に、正しい順序で記号を並び替えて下さい。※言葉の発達過程を問う項目  
 ②【      】内に当てはまる言葉を下記の語群から選び、解答欄に記入しましょう。  
 ※言葉の発達に関する専門用語を問う項目

≪②の語群≫ ただし、選択肢には解答欄に入らない語句も含まれています。

心	保存	初語	象徴	内言	生理
原始	愛着	同化	社会	調節	二語
表象	喃語	葛藤	頭足人	誤信念	三つ山
ハンドリガード	クーイング	ワーキングモデル	イヤイヤ	シェマ	二次元可逆操作
プライベートスピーチ	リーチング	目と手の協応	循環反応	延滞模倣	人見知り
丸のファンファーレ	対象の永続性	分離不安	叫喚発声	探索行動	安全基地

ア) 何かの活動中にぶつぶつ発せられる、周りの誰かに伝えようとする意図のない独り言である【A】が現れる。

イ) 自発的な発語が【B(数字)】語を超えると語彙が急激に増加する。この時、共同注意を用いて、自分から指差しをして新しい語彙を覚えようとする。この際、相手と自分と対象物という3つの要素を繋ぐ関係を三項関係と呼ぶ。

ウ) 機嫌の良い時に喉の奥をクーと鳴らす音声である【C】を発する。

エ) 「マ・マ・マ・マ…」などの子音＋母音の音節を複数回リズムカルに繰り返す規準【D】が出現する。

オ) 初めて意味のある言葉(有意味語)が出現する。初めて出現する意味のある言葉のことを【E】と呼ぶ。